

タイトル	トンガ王国ハアノ島ハアノ村の漁撈活動
著者	須田，一弘；口蔵，幸雄
引用	北海学園大学人文論集，23・24：349-374
発行日	2003-03-31

トンガ王国ハアノ島ハアノ村の漁撈活動

須 田 一 弘・口 蔵 幸 雄*

1. はじめに

コウモリと鳥類以外に陸生の動物性食物資源をもたない太平洋の島嶼への人類の進出の初期においては、海産資源の重要性はきわめて高かったであろう。ポリネシア各地の遺跡は、移住初期の海産資源への大きな依存とその後の急速な資源枯渇を示している。火山島や大陸島では海岸部から離れて内陸部に集落が発達し、集約的な農耕によってそれが維持されるようになった。このように、太平洋の島嶼の伝統的な生業の基盤は、樹木栽培を含む農耕と海産資源の集約的利用であったが、この地域へのヨーロッパ人の進出以来、生業形態は大きく変容し、輸入食物が重要性を増すとともに、漁撈の占める地位も相対的に低下した。

太平洋の漁撈活動の人類学的研究が考古学的な漁具の分類や分布、伝統的な漁法や海域利用の復元に集中してきた (Reinman, 1967; Bellwood, 1978; Oliver, 1989; Lieber, 1994) のも、このような事実がその一因となっているであろう。そのためか、現代のポリネシアにおける漁撈活動そのものや、それらの社会における位置の研究はきわめて少ないように思われる。また、海産資源を取り上げる場合には、それが食生活に占める地位についての研究が中心となり (村山, 1999), 輸入食物による肥満の問題に焦点をあてた食物や栄養の問題がテーマであり、漁撈活動については注目されることが少ない (足立, 1986; 山本他, 1985 等)。これらの研究で論じられて

* 岐阜大学地域科学部教授

いるのは、近代化の過程で、イモ類と魚介類の伝統的な食生活からパンや輸入食品（コンビーフや冷凍羊筋肉等）などの近代的な食生活への変化が、トンガ人の健康にマイナスの影響を与えているというものである。しかし、都市部の食生活と身体観や健康観について詳細な研究を行った井上(2001)によれば、都市部における魚介類の摂取量の少なさ、海産資源へのアクセスの問題を考慮する必要がある、必ずしも近代的な都市部と伝統的な離島沿岸部の食生活の違いが主たる要因ではないようである。

では、離島の沿岸村では、現在、どのような状況の下で具体的な生活が営まれているのだろうか。また、その中に占める漁撈活動の役割とはどのようなものなのであろうか。筆者らが調査を行ったトンガ王国の離島のひとつであるハアノ村では、船外機付きのボート、ナイロン製の釣り糸や網のような近代的な漁船・漁具を導入してはいるものの、主に自給用の漁撈活動が廃れることなく継続されており、漁獲物はもっとも重要な動物性タンパク質源となっている。また、それは村の諸行事における会食では欠くことのできない構成要素でもある。この小論では、ハアノ村で現在行われている漁撈活動を具体的に記述して、それがトンガの近代化、生活の変化においてどのような意味を持つものであるのかを考えてみたい。

筆者らを含む日本の生態人類学研究者や漁業地理学者は、日本をはじめとする世界各地で漁撈活動の調査・研究をおこなってきている。これらの研究は、漁場の自然環境の周期性や地形の微小変異に対応した漁具・漁法の選択や調整、漁撈活動の時間・空間構造の量的把握、漁獲量の変動や個人差とそれらを生み出す要因など生態学的視点に基づくとともに、漁撈活動の社会的側面や食生活に占める役割、世界的経済変動を含む外部社会との関係の中での変化などを扱っている（Akimichi *et al.*, 1996；口蔵, 1977；大塚, 1977；須田, 1987；田和, 1997 等）。この小論では、乗船をふくむ参与観察に基づく漁撈活動の記載、漁獲物の計測とその利用、漁法の選択の世帯間変異とその要因などを扱う。筆者らは伝統的側面を色濃く残すハアノ村の生活における変容の実態と要因を、生態学的な視点から総括的に継続的に研究を行ってきた。この小論はこれらの研究成果の一部

である。なお、ハアノ村における調査は、2001年10月5日から15日までと、2002年10月11日から29日までの、のべ30日間にわたって行われた。

2. 調査地の概要

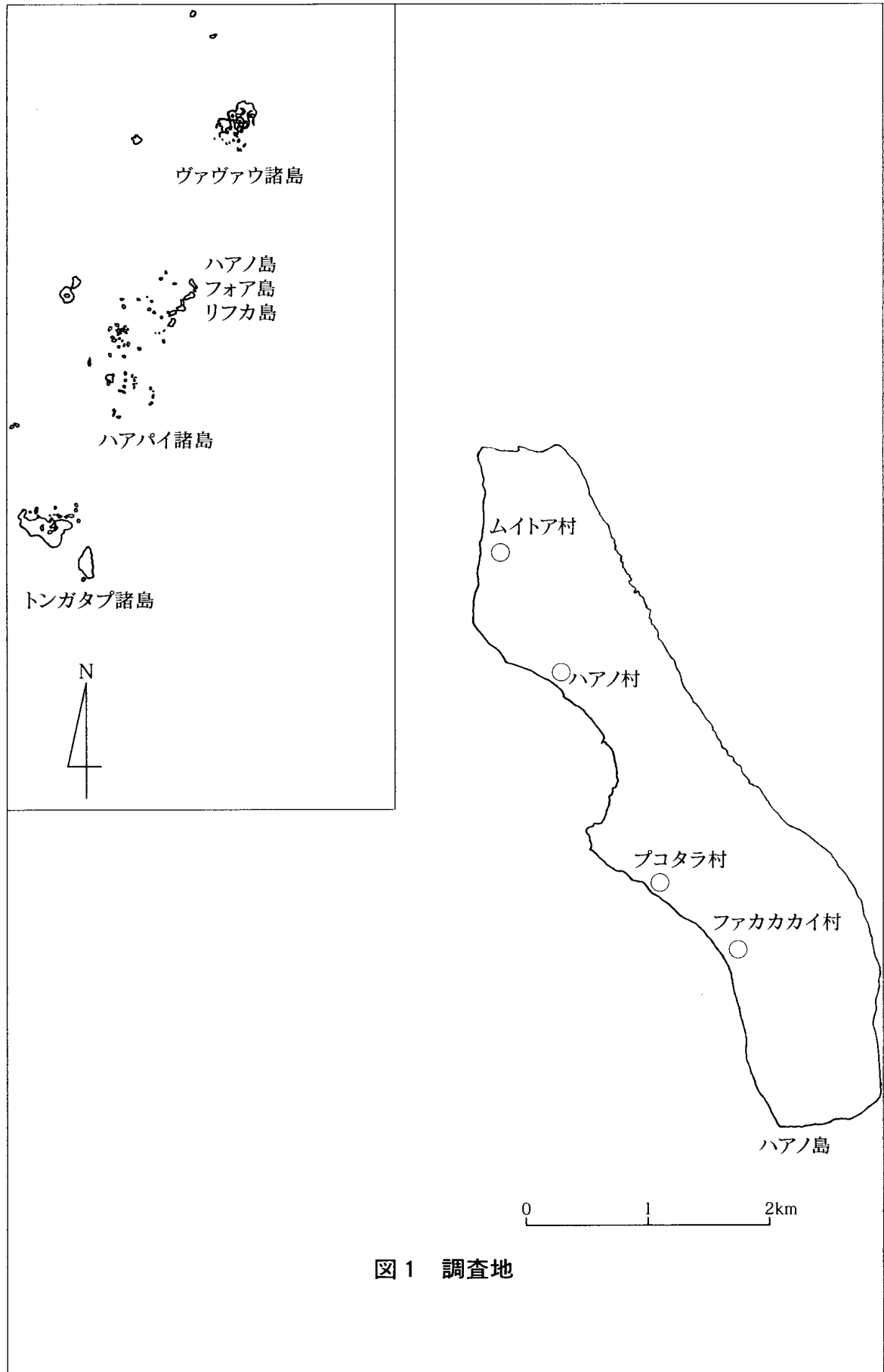
〈自然および社会環境〉

トンガ王国は、首都ヌクアロファのあるトンガタブ島を中心とする南部のトンガタブ諸島、リフカ島を中心とする中部のハアパイ諸島、ヴァヴァウ島を中心とする北部のヴァヴァウ諸島の3つの諸島群と、最北部の二つの孤島ニウアフォオウ・ニウアトプタブ島からなっている。調査対象村落であるハアノ村のあるハアノ島は、ハアパイ諸島の北部に位置している(図1)。トンガ王国は、亜熱帯海洋性気候に属し、年間平均気温は25℃前後である。年間を通じ南東貿易風の影響を受け、緯度の割に温暖な気候であるといえる。しかし、1月から3月の雨期にはときおり熱帯性低気圧におそわれ、被害を受けることがある。とくに、低いサンゴ島が中心のハアパイ諸島は強い風の影響を受けやすく、家屋の倒壊などの大きな被害に見まわれることもある。

ハアパイ諸島の中心地はリフカ島のパンガイで、政府の諸機関の支所や中高等学校、マーケットなどがある。ハアノ島からパンガイまでは、まず南隣のフォア島へ船外機付きボートでおよそ45分かけて行き、さらに、そこからタクシーなどの自動車でフォア島とリフカ島をつなぐサンゴ礁の橋を渡って約30分かかる。

ハアノ島にはハアノ村の他に、ムイトア村、プロタラ村、ファカカカイ村の4つの村があるが、島の南部にあるファカカカイ村は政府所有地に、残りの3村はヌクアロファに住む貴族の所有する土地にある。ハアノ島の北東側は風や波が強く、砂浜も少ないため、村落はいずれも島の南西岸に位置している。

ハアノ村とプロタラ村には、公立の小学校が設置されているが、中等教育のための学校はハアノ島には置かれていない。トンガの親にとって子供



に教育を受けさせることは子供への愛情を表現する手段の一つであるため (Evans, 1999), 小学校を終了した子供たちは親元を離れ, リフカ島のパンガイや首都ヌクアロファの中等学校へ進学し, 時にはニュージーランドなどで高等教育を受けることもある。

ハアノ島には大型船舶が着岸できる埠頭はなく, 電気や水道も整備されていない。また, 島内の交通手段は, 徒歩か馬車, 自転車に限られている。このことが, 後述するように, 島の経済活動の大きな制限要因となっている。ハアノ島と外部との通信手段は, ハアノ村, ファカカカイ村それぞれに一機ずつ設置された無線式公共電話に限られている。また, ムイトア村を除く3つの村には, 缶詰やタバコ, 洗剤などを売る小さな売店 (fale-kolola) があるが, 品揃えは悪く, 品切れになることも多い。そのため, ハアノ島の人々は頻繁にパンガイを訪れ, マーケットや大きな売店で食料や衣料等の生活必需品を購入している。

こうした中, 2001年10月に, ニュージーランド政府の資金援助によるトンガ王国離島振興事業の一環として, ハアノ島に発電施設を建設し全島に電力を供給することが決定し, 2002年8月から工事が始まった。工事が終了し, 実際に電力が供給されるのは2002年12月の予定である (写真1)。

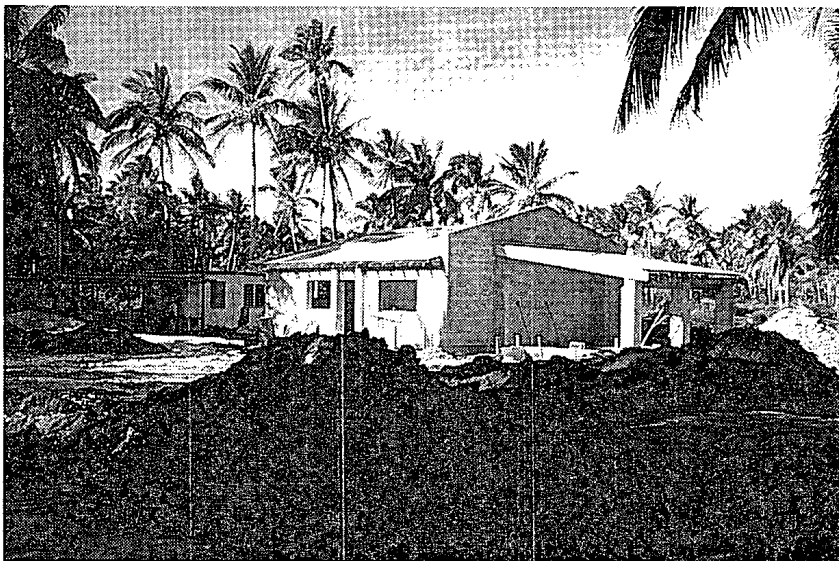


写真1 建設中の発電所

〈ハアノ村の経済〉

1970年以前には300人を越えていたハアノ村の人口は、ハアパイ諸島の中心地リフカ島パンガイや首都ヌクアロファへの転出、ニュージーランドやアメリカ合衆国への移住者の増加などのため減少の一途をたどっている(Evans, 2001)。ハアノ村を含めハアノ島内には現金収入源が乏しく、島外への移住はいずれも職を求めての、経済的な理由から行われた。そして、移住者から還流する送金は、村の最大の現金収入源になっている。短期間の滞在者や小学校教員を除く2002年10月現在のハアノ村の世帯数と実人口は、22世帯88人(男性45人、女性43人)である(表1)。トンガでは、土地は王族、貴族または政府が所有し、国民はそれを貸与されて家屋や耕

表1 ハアノ村の世帯構成

世帯 番号	成人		老人		子供		ボート	漁種	畑 耕作		備 考
	男	女	男	女	男	女			エーカー		
01	1	2			2		有 (共有)	釣り	4.00	2.00	
02	1	1			3		無	素潜り, 釣り	4.00	1.00	
03	2	3					無	釣り	4.00	2.00	
04	2	1	1				無	網参加	6.00	2.00	
05	1	1					有 (共有)	釣り	4.00	2.00	Town Officer
06		1	1				無	—	4.00	1.00	
07	2	1	1	1			有	釣り	6.00	2.00	
08	1	1					有	釣り	5.00	1.00	
09	1	2			1		有	釣り	6.00	2.00	
10	1	4					無	—	6.00	1.00	
11	2	2					有	釣り	4.00	2.00	
12	1	1			2		無	素潜り	0.00	1.00	借地
13			1	1			無	—	0.00	0.00	
14	1	1				3	無	網参加	4.00	1.00	
15	1	1			2	1	無	素潜り	8.00	2.00	
16	3				1		有	釣り	4.00	1.00	
17	2	2			1	1	有	えり, 網	4.00	2.00	
18	1	1					有	えり	4.00	2.00	
19	3	1					無	釣り	4.00	2.00	
20	1	2			2		無	釣り, 網	4.00	2.00	
21	1	2		1			無	—	4.00	2.00	District Officer
22	2	2					無	えり	3.00	1.00	
合計	30	32	4	3	11	8			92.00	34.00	
平均									4.18	1.55	

地として利用している。首都ヌクアロファ周辺では、人口増のため土地不足が深刻な問題になっているが、人口が減少しているハアノ村では、宅地及び耕地のいずれも十分に確保されている。

各世帯の生業活動は、農耕、漁撈活動、家畜飼育からなり、いずれも自給を主目的としたものである。ハアノ村の全耕地面積は 92 エーカーで、世帯あたりの平均耕地は 4.18 エーカーである（表 1）。隣村のムイトア村から転入してきた 1 世帯（世帯番号 12）のみが、耕地を借りて耕作しているが、ムイトア村に住む父親が耕地を所有しており、いずれはそれを引き継ぐことになっている。首都ヌクアロファのあるトンガタブ島では、日本へ輸出するカボチャの栽培などのため耕地不足や土壌劣化が深刻な問題になっているが（Stevens, 1999）、主として自給のためにタロイモやヤムイモなどの根菜類を栽培しているハアノ村では（写真 2）、そのような問題はなく、全耕地面積の約 3 分の 1 の 34 エーカー（世帯あたり 1.55 エーカー）が現在実際に耕作されているにすぎない。また、各世帯の宅地内には、パンの木が数本植えられており、その実は 4 月から 6 月と 9 月から 11 月の間に、主食として利用されている。

ほとんどの世帯はブタ、イヌ、ニワトリを放し飼いにしており、いくつかの世帯はウマやヤギを飼っている（写真 3）。これらの家畜はいずれも食



写真 2 タロイモを中心とした畑



写真3 ブタやヤギ、ニワトリは村の中で放し飼いにされる

用とされるが、食料としてのイヌの価値はそれほど高くはない。また、ウマが食用にされるのは葬式などの儀式時に限られ、通常は馬車などの運搬用に利用されている。その他の家畜も、日常の食卓に上ることはまれであり、年に数回あるキリスト教に関連した共食儀礼などの時に食べられるのみである。これに対し、後述する漁撈活動で得られる魚類等は、日常的に消費されるタンパク源になっている（写真4）。

男性が主として行う上記の生業活動がもっぱら自給を目的としたものであるのに対し、女性が作るパンダナスマットは、各世帯にとって移住した家族からの送金に次ぐ貴重な現金収入源になっている。幅 8 feet、長さ 12 feet ほどのマットは、婚姻時や葬儀の際の交換財として重要な位置を占めている。とくに、ニュージーランドへ移住したトンガ人社会では、母国の伝統を象徴する財として、貴重品として扱われている。一人の女性は、年間およそ 3 枚のパンダナスマットを作り、1 枚約 350 パアンガ（1 パアンガは約 60 円）で取り引きされる。



写真4 宴会では、ブタやニワトリの他、魚貝類も貴重なごちそうである

3. 漁撈活動

〈漁撈活動の概要〉

ハアノ島周辺の海域は、カツオ、マグロ、シイラなどの回遊魚、ハタやブダイなどの底棲魚、ロブスターやウチワエビなど甲殻類の格好の漁場となっている。ただし、風浪の厳しい島の北東側は、漁場として利用されることはほとんどなく、漁はもっぱら島の南西側で行われる。村ごとの漁場の境界はなく、ハアノ島民はその周囲の海域を自由に利用している。

船外機付きボートを利用した一本釣り（toutai）とトローリング（fakatele）、素潜り漁（uku）、少人数で行う巻刺網漁（kupenga）、金網を使ったえり漁（pa）が、ハアノ村で行われている主たる漁撈活動である。これらはいずれも男性によって操業されている。トンガでは、慣習的にジェンダーにより活動が制限されており、女性が行う漁撈活動は、浅瀬での採貝

とタコ採集などに限られている。しかし、隣村のムイトア村と異なり、ハアノ村の近くにはこれらの活動のための好漁場がなく、漁撈活動はもっぱら男性によって行われている。

ハアノ村の22世帯のうち、漁撈活動を行っていないのは3世帯にすぎない。このうち2世帯は成人男性がいない世帯(06, 13)であり、1世帯(21)は政府直轄地であるファカカイ村を除く3村の首長(District Officer)として収入を得ている。漁獲物はそれぞれの漁撈活動に参加したメンバーや近しい親族に分配され、食卓にあがる。冷蔵設備や輸送の問題から、漁獲物をリフカ島パンガイのマーケットで販売することはほとんどないが、近年始まったえり漁や巻刺網漁では、海岸でしばしば村人に漁獲物を販売されることもみられた。したがって、漁撈活動を行わない3世帯も魚を得ることは可能となっている。このように、ハアノ村では前述の農耕とあわせ、食料獲得のための活動は主として男性が担い、女性はパンダナスマット製作などで現金収入を得ているのである。

ハアノ村の漁撈活動がどのように行われているのかを具体的に把握するため、以下では、4種の漁撈活動について紹介する。

〈一本釣り及びトローリング〉

船外機付きボートを利用して行われるのが、一本釣りとトローリングである。この二つの漁撈活動は出港から帰港までの間に、一連の活動として行われることが多い。トローリングの対象魚種はカツオであり、もっぱらその後のマグロやシイラを対象とした一本釣りの餌として利用される。一本釣りの対象魚種は、この他にハタやフエダイの仲間も含まれるが、その場合の餌はカツオではなく、タコや釣り上げたフエダイ等を切り身にしたものが使われる。出港時間は明け方、日中、午後、夕方とさまざまだが、夕方に帰港した場合は明け方まで帰らないことが多い。したがって、活動時間は夜間の方が長くなることになる。これは、海岸のボート係留場の近くにいくつものサンゴ礁があり、夜間はボートを座礁させる危険性が高いためである。ここでは、日中と夜間の漁をまとめて紹介するが、漁獲高に

については別々に分析することにする。

表2から表5は、調査期間中に日中に行われた一本釣り及びトローリングに同行して、その活動を individual tracing 法 (Suda, 1994) によって記録したものである。出港の後、カツオ鳥の群を発見した場合には (2001 年 10 月 8 日と 9 日)、擬似餌を流してトローリングを行う。群が遠ざかるとトローリングを終了する。カツオが釣れると、それを餌にマグロやシイラなど大型の回遊魚の一本釣りを開始することもあるが、これは日中よりも夜間の漁に多く見られるようである。日中の場合は、あらかじめ見当をつけていたポイントに移動し、タコなどを餌にハタやフエダイを対象とした一本釣りを開始する。釣っている間は投錨せずにエンジンを切るため、風や

表 2 2001 年 10 月 8 日の釣り漁

時 分	作 業	漁獲物	重量 (kg)	備 考
15 50	出港			
55	トローリング開始			
16 04	釣り上げ	カツオ	0.75	
42	釣り上げ	ツムブリ		
52	釣り上げ	カツオ	0.75	
17 10	トローリング終了・移動			
25	釣針付け替え			エサはタコの墨袋
30	一本釣り開始			
32	釣り上げ	フエダイ		
40	エサ付け替え			エサ取られる
48	移動			
50	再開			
18 00	釣り上げ	ハタ		
05	釣り上げ	ハタ		
09	釣り上げ	ハタ		
13	釣り上げ	ハタ		
17	釣り上げ	ハタ		
21	釣り上げ／移動	ハタ		
23	再開			
28	釣り上げ	ハタ		
34	釣り上げ	フエダイ		
35	終了			
52	帰港		11.15	
合 計			12.65	

表3 2001年10月9日の釣り漁

時 分	作 業	漁獲物	重量 (kg)	備 考
06 53	出港			
58	トローリング開始			2本, 擬似餌
07 50	トローリングをやめ一本釣り開始			餌はタコ
55	釣り上げ	ブダイ		
58	釣り上げ	ハタ		
08 02	移動			
05	再開			
11	釣り上げ	ハタ		
16	釣り上げ	フエダイ		
26	移動			
30	再開			
35	餌付け替え			
36	移動			
40	再開			
56	移動			
09 00	再開			
05	釣り上げ	ハタ		
11	釣り上げ	ハタ		
12	移動			
14	再開			
24	移動, トローリング再開			
50	トローリングをやめ一本釣り開始			
59	移動			
10 02	再開			
10	釣り上げ	フエダイ		
14	餌とられる			
18	釣り上げ	ブダイ		
20	釣り上げ	ハタ		
25	餌付け替え			
30	釣り上げ	ハタ		
34	釣り上げ	ハタ		
40	釣り上げ	ハタ		
42	移動			
50	釣り上げ失敗			
11 02	釣り上げ	ハタ		
05	釣り上げ	ハタ		
10	釣り上げ	カワハギ		
14	釣り上げ	ブダイ		
23	釣り上げ	カワハギ		
26	釣り上げ失敗			
30	終了			帰港途中トローリング
46	帰港			
		合 計	7.25	

表 4 2001 年 10 月 13 日の釣り漁

時 分	作 業	漁獲物	重量 (kg)	備 考
10 17	出港			
36	漁場着			
38	一本釣り開始			餌はコノシロ
43	釣り上げ	ハタ	0.50	
47	釣り上げ	ハタ	0.50	
53	釣り上げ失敗			
11 01	一本釣り終了			
03	トローリング開始			擬似餌
07	釣り上げ失敗			擬似餌とられる
14	擬似餌を付け替え再開			
32	釣り上げ	カツオ	0.65	
47	終了			
12 25	帰港			
		合 計	1.65	

潮流によって次第にポイントからずれてしまう。当たりがなくなると、ボートを移動させ、以前のポイントに戻るか、新しいポイントに向かい、再び漁を開始する。当たりが遠ざかると、頃合いを見て漁を終了し帰途につく。海岸の係留場に着くまで、擬似餌を流し、トローリングを行うことが多いが、漁獲はほとんど期待できない（写真 5，6）。

調査期間中に行われた日中の漁は 12 回、夜間の漁は 22 回であるが、そのうちそれぞれ 4 回と 7 回、すなわちほぼ 3 分の 1 は漁獲をあげられなかった。また、日中の最高漁獲量は 131.4 kg、夜間は 101.8 kg であり、いずれもマグロが主たる漁獲物であった。漁獲物の多くは自家消費や近しい親族に分配されるが、漁獲量が多い場合にはリフカ島パンガイに運び、マーケットで販売することもある。また、2002 年には発電所建設や埠頭整備のための労働者が滞在していたため、彼らに販売することもあった。販売価格は魚種にかかわらず 1 kg 3 パアングである。

一本釣りおよびトローリングを行っているのはハアノ村の半数の 11 世帯である。ハアノ村には 8 隻のボート（うち 1 隻は親族による共同所有）があるが、そのうち 6 隻がこの漁を操業している。ボートを所有せずに釣

表5 2002年10月14日の釣り漁

時 分	作 業	漁獲物	重量 (kg)	備 考
14 25	出港			
36	漁場着			
40	一本釣り開始			
45	オモリ付け替え			
48	再開			
54	釣り上げ失敗			餌とられる
56	移動			
15 01	再開			
10	釣り上げ	ハタ	0.35	
27	釣り上げ	ブダイ	0.65	
35	釣り上げ	ブダイ	0.53	
39	釣り上げ	ハタ	0.23	
44	釣り上げ	フエダイ	0.92	
49	釣り上げ失敗			餌とられる
16 01	移動			
07	再開			
16	移動			
18	再開			
30	釣り上げ	ハタ	0.62	
35	釣り上げ失敗			餌とられる
40	釣り上げ	ハタ	1.43	
46	移動			
50	再開			
54	釣り上げ	ブダイ	0.36	
17 03	移動			
07	再開			
16	終了			帰港までトロリング
38	帰港			
		合 計	5.09	

り漁を行っている世帯は、親族関係や友人関係にあるボートを所有する世帯と共同で操業している。ボートと船外機の値段は、合わせておよそ3,000パアンガであり、現金収入が乏しいハアノ村の人々にとっては大きな負担である。それぞれの世帯がボートを購入した資金は、海外に移住した家族からの送金によるものか、または、本人が海外で働いて持ち帰った現金による。

船外機付きボートの他、釣り漁のコストとしては、釣り針や釣り糸があ



写真5 一本釣り



写真6 良い漁場にあたると、次々に魚が釣れる

り、200～400 パアングが必要である。また、一回の操業にかかる燃料費は、およそ 24～60 パアングになる。

〈素潜り漁〉

村の近くのサンゴ礁で行われる素潜り漁は、船を使う必要がなく単独で行われる。また、漁具への投資額が少ないにもかかわらず、他の漁法と同程度の漁獲をあげることができる、効率のよい活動である。しかし、サメに襲われるなど事故に遭う危険性や、長期間にわたり素潜り漁を続けることは健康を損なうと考えられているため、操業しているのは4世帯に過ぎない。また、操業者はいずれも20～30代の男性に限られている。

素潜り漁は、水深数メートルのサンゴ礁のすき間に隠れているブダイなどの魚類や、ロブスター、ウチワエビなどの甲殻類を、1mほどの鉄製のモリで突いて捕獲する漁法である。日中にも行われるが、夜間に強力な電灯を使用して捕獲する方が効率がよいようである。漁獲対象のうち、とくにロブスターはパンガイでは1kgあたり10パアングと、他の魚にくらべ高額で取り引きされているが、前述のように輸送や冷蔵施設の問題から、漁獲されても販売されることはまれである。漁に出るのは、教会関係など儀式の際の共食儀礼のために食材を得ることがきっかけになることが多い。

素潜り漁に必要な漁具は、ゴーグル、足ビレ、モリ、水中で使用可能な電灯等であり、総額で180パアングほどである(写真7)。

〈巻刺網漁〉

刺網を用いて魚を捕る方法は、以前からハアノ村の人々に知られていた。しかし、ハアパイ諸島では刺網は販売されていなかったため、この漁法がハアノ村に導入されたのは、今からわずか10年ほど前である。夜間に刺網を海中に設置し、翌朝回収して網目にかからめ取られた魚を捕獲する方法も知られているが、現在ハアノ村で行われているのは、メアジなどの魚群が海岸近くに回遊した際に、魚群を囲い込むように刺網を設置し、数名の男

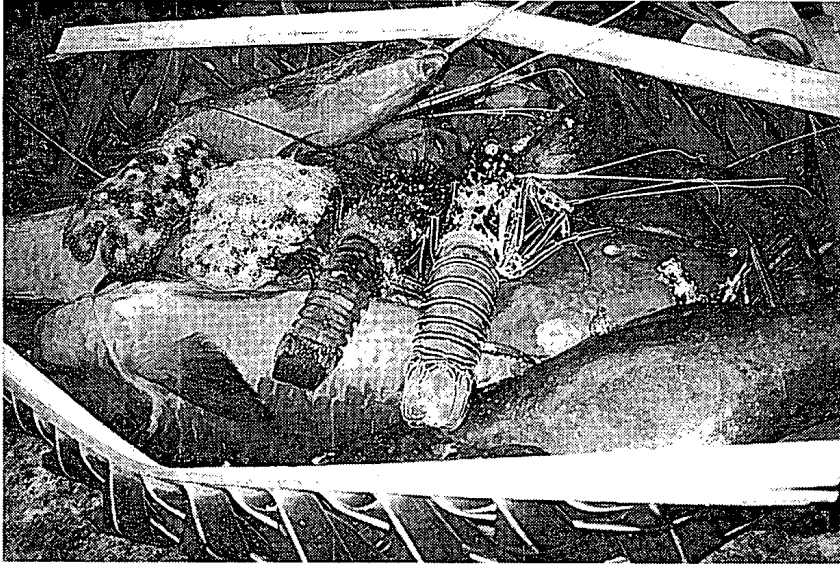


写真7 素潜り漁で捕らえたロブスターやブダイ

が海面を叩いて魚を網に誘導する、いわゆる巻刺網である。とくに、メアジは年に数度、ハアノ村近くの海岸に群をなして押し寄せ、その際には巻刺網で数千匹の獲物を捕獲することもある。敷設形の刺網と違い、魚群を確認してから漁に取りかかるので、活動自体はそれほど頻繁なものではなく、調査期間中ののべ30日間で、出漁が確認できたのは2回にすぎなかった。

現在、ハアノ村で刺網を所有しているのは1世帯（世帯番号17）で、この世帯を中心に他に数名の男が協力して巻刺網漁を行っている。また、所有者の兄（世帯番号20）は、網を借りて単独で敷設形の刺網を行うこともある。後者の場合は、漁獲物は自家消費および親族への分配が主となるが、前者では、漁獲が多い場合には、村内や島内の他の村で販売されている。ただし、村内で漁獲物が販売されるようになったのは2001年からであり、それ以前は他の村には販売していたものの、村内の人々には無償で分配されていた。現在、販売価格は魚種に関わらず1kgあたり3パアンガである。

網は、長さ100mで160パアンガほどであり、その他にウキ（1kgあたり2.5パアンガ）とオモリ（同じく3パアンガ）を購入し、自分で完成品に仕上げる。ただし、現在入手できるのは首都ヌクアロファに限られているので、購入するのは容易なことではない。そのため、多くの村人が網の

購入を考えてはいるが、なかなか実現しないのが現状である。そうした中、2002年10月に、Town Officer(村長)をしている男性(世帯番号05)が、つてを頼って網一式を購入し、2003年からの操業を計画中である。

〈えり漁〉

2001年に、ハアノ村の2世帯(世帯番号17, 18)が共同で“pa”と呼ばれるえり漁を始めた。“pa”は、海岸からすぐ近くのサンゴ礁の上に約1m間隔で枝を打ち込んで固定し、その間に金網を張り垣網と囲網を作った、定置網に類似した漁法である。産卵などのため沿岸に集団で回遊してくるメアジやボラ、ヒメジなどが、満潮時に垣網をたどって囲網に入る。囲網の部分は三角形になっており、各頂点には魚群が誘導されて次第に入っていく魚捕部が設置されている(写真8)。操業者は、干潮時に徒歩で囲網まで行き、魚捕部に集まった魚をすくい網で捕獲する。

“pa”の初期投資には、1,000パアングをこえる資金が必要である。そのためか、現在のところ“pa”を設置しようとする世帯は他にはない。この2世帯のうち、1世帯(17)はかつてニュージーランドに移住し、現金を貯めて帰国した家族である。また、もう一つ(世帯番号18)は、すべての子供が海外に移住しており、彼らからの送金があるため経済的に余裕のあ

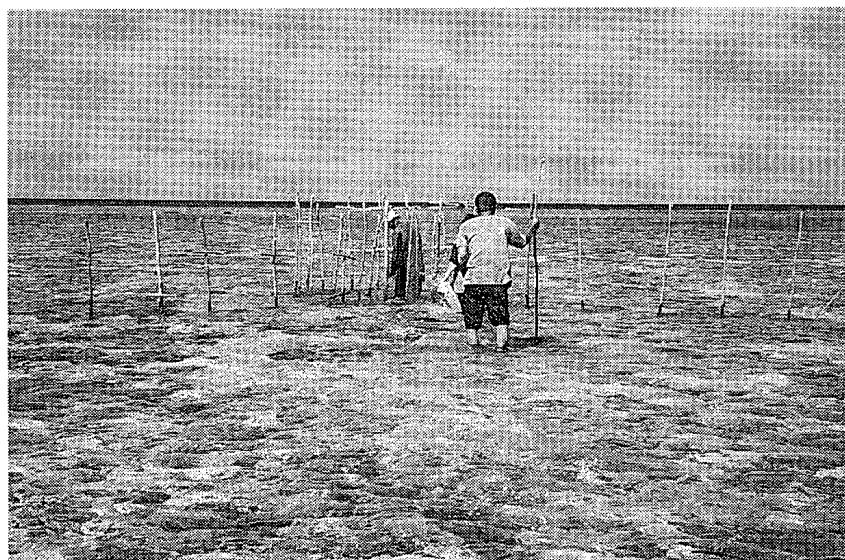


写真8 “pa”の漁獲は干潮時に行う



写真 9 “pa” で捕れた魚は浜辺で村人に販売される

る世帯である。

さらに、この漁具は風波に対してもろく、破損した場合には修理のための費用も必要となる。2002 年の調査時には、10 月 14 日から順調に漁獲をあげていたものの、20 日の夜に風波のために囲網が破損し、せっかく入った魚が逃げ出したため、修理に手間取りその後漁獲をあげることはできなかった。

“pa”の漁獲量は魚群の回遊に左右される。ほとんど漁獲のない日もあれば、一度に 400 kg 以上の魚を捕獲することもある。一本釣りや素潜り漁が自家消費を前提とした活動であったのに対し、“pa”で捕獲した魚は、通常、前述の巻刺網漁と同様、海岸で村人に販売されることが多い（写真 9）。

4. 漁撈活動の選択

ハアノ村で何らかの漁撈活動を行っている 19 世帯のうち、11 世帯が釣

り漁を、4世帯が素潜り漁を、同じく4世帯が網漁を、そして2世帯がえり漁を行っている(表1)。このうち、複数の漁撈活動を行っているのは3世帯のみであり、他の世帯は一つの漁撈活動だけを行っているにすぎない。これは、地元で現金収入を得る手段が乏しく、収入の多くを海外に移住した家族からの送金に依存しているため (Evans, 2001), 漁具の購入が容易ではないことによっていると思われる。このことが、村人の漁撈活動の選択を制限する大きな要因となっている。

漁撈活動を行う上で、もっとも高価な投資は船外機付きボートの購入のように思われる。ハアノ村には、現在8隻の船外機付きボートがあり(うち1隻は2世帯で共有)、その所有率は全世帯の3分の1を越えている。しかし、船外機付きボートは漁撈活動のみに使用されるのではなく、むしろ、隣のフォア島への交通手段として重要な役割を演じているようである。親族や知人、パンガイで就学している子供たちの送迎や、パンガイのマーケットでの生活必需品の買い物のため、毎日必ずいずれかのボートはハアノ村とフォア島を往復している。したがって、船外機付きボートの購入は、漁撈活動への投資というよりも、離島という環境における交通手段の確保という意味合いが強い(写真10)。

釣り漁を行っている11世帯のうち、4世帯は船外機付きボートを所有し



写真10 村人を満載して Foa 島に向かうボート

表 6 漁法ごとの漁獲量

漁法	日中の一本釣り	夜間一本釣り	素潜り	巻刺網漁	えり漁
サンプル数	12	22	3	2	5
主要漁獲対象	カツオ、マグロ ハタ、フエダイ	マグロ、カマス シイラ、フエダイ	ブダイ、ハタ、アイゴ イセエビ、ウチワエビ	メジナ、チノマン フエフキ、メアジ	ボラ、ヒメジ メアジ
総漁獲量 (kg)	172.29	397.30	46.10	43.30	82.80
最大漁獲量 (kg)	131.40	101.80	26.00	29.30	40.00
最少漁獲量 (kg)	0.00	0.00	7.70	14.00	3.00
平均漁獲量 (kg)	14.36	18.06	15.37	21.65	16.56

ていない。これらの世帯の男性は、友人や親族が所有するボートに同乗して釣り漁を行っている。夜間の一本釣りでは、日中の漁にくらべ危険も多いので、かならず複数で操業している。世帯内に出漁可能な男性がいなかった場合には、彼らを誘って漁に出かけることになる。なお、同乗するメンバーはほぼ固定している。

つぎに、各漁撈活動の生産性についてみていくことにする。表 6 は、釣り漁を日中と夜間に分け、各漁撈活動の一回あたりの漁獲量をまとめたものである。平均漁獲量は、14.36 kg（日中の一本釣り）から 21.65 kg（巻刺し網漁）まで大きな違いはないものの、各漁撈活動ごとの漁獲量の変動には差異がある。すなわち、二つの釣り漁では漁獲量の変動が大きいのに対し、他の 3 種の漁撈活動は漁獲量の変動はそれほどきわだつてはいない。また、釣り漁では、漁には出たものの、漁獲をあげられなかった事例も多い。日中では 12 例のうち 4 例で、夜間では 22 例のうち 7 例で魚を釣り上げることができなかった。いっぽうで、日中の全漁獲量 (172.29 kg) のおよそ 76% (131.4 kg) が、また、夜間の全漁獲量 (397.3 kg) のおよそ 25% (101.8 kg) が、一回の出漁で占められている。釣り漁の場合には、漁獲をあげることができなくても船外機エンジンの燃料を消費することになるので、リスクの高い活動であるといえることができる。

これに対し、素潜り漁は漁具への投資が少なく、出漁ごとに費用がかかることもない。また、全漁獲量 (46.1 kg) の約 7% (3.1 kg) を占めるロボスターは他の魚 (1 kg あたり 3 パアング) とくらべ販売価格が高く (1 kg あたり 10 パアング)、生産性の観点からいえば、安定した活動といえる

かもしれない。しかし、通常、需要があるのはリフカ島のパンガイに限られるため、冷凍冷蔵のための設備がないハアノ村の人々にとって販売は容易ではない。また、前述のように、漁にともなう危険性や健康に関する配慮から、素潜り漁を行う世帯が少なくなっているのであろう。

いっぽう、巻刺網漁とえり漁は漁具への投資の多い漁撈活動である。また、どちらも魚群が海岸近くに回遊するのを待ち受けて捕獲しようとするものであり、回遊する魚を追いかけて捕獲する釣り漁とは性格を異にしている。とくに巻刺網漁では、魚群があらわれない場合には漁を行わないので、釣り漁のように漁獲をあげられないことはないものの、出漁機会そのものが制限されることになる。えり漁でも、漁具が破損した場合には、囲網に入った魚が逃げるため、漁を行うことができないこともある。調査期間中にメアジなどの大群が回遊することはなかったものの、二つの漁撈活動の平均漁獲量(巻刺網:21.65 kg, えり漁:16.56 kg)は、他の漁とそれほど違いはない。村人の言うように、大群が回遊した際に1,000 kgを越える漁獲があるとすれば、出漁機会の少なさも相殺されるのかもしれない。

5. おわりに

これまでみてきたように、ハアノ村でもっとも多く世帯が行っている漁撈活動は、経済的なリスクが大きいにもかかわらずそれほど現金収入の見込めない釣り漁であることがわかる。これは、一見するときわめて奇妙なことのようと思われる。乏しい現金で購入した燃料を使って、漁獲量の変動の大きな漁を行い、しかも、漁獲のほとんどが自家消費や分配にまわされ、現金を得ることはまれだからである。しかし、ハアノ村の人々にとって、畑で主食である根菜類を作ること、海から副食である魚などを得ることは、貨幣経済の文脈とは異なり、サブシステムとしての活動とみなされている。食料を得ることは、現金を獲得するための活動ではなく、人間の生存に不可欠な基本的活動であり、漁獲量が多い際にそれを販売して現金を得ることは副次的な意味しか持っていないのである。このことを可能

にしているのは、トンガの経済が海外の移住者からの送金に頼っている、いわゆる MIRAB 経済であること (Evans, 1999) によっていよう。首都ヌクアロファのあるトンガタブ島などでは、少し前から農作物を販売して現金を得ることも一般的になってきてはいるが (Stevens, 1999)、離島のハアノ村では、現金を得ることは村の外で行われることなのである。

しかし、数年前からそれとは異なる動きも出てきている。巻刺網漁とえり漁を中心となって行っているのは、海外に移住した経験を持つ世帯 (17) の男性である。釣り漁と素潜り漁が自家消費と親族への分配を主、販売を従として行われているのに対し、巻刺網漁とえり漁は販売を主として行われている。しかも、販売はパンガイで行われるのではなく、海岸で村人を対象に行われている。親族や友人への贈与や分配を当然と考えていた村人にとって (Evans, 2001)、このことははじめのうちは奇異に映ったようである。しかし、数年たった現在では、この二つの漁が行われると村人は魚を購入するために海岸に集まってくる。今では、村内での魚の販売は当たり前の行為として受け止められているようである。二つの漁を行っている 2 世帯が、船外機付きボートを所有しているにもかかわらず釣り漁を行っていないのは、現金を獲得する手段として、より安定した活動を選択しているためと考えられる。

村内に需要があるのは、多くの世帯が操業している釣り漁で漁獲量の変動が大きく、また、素潜り漁の出漁機会も限られており、日常の副食の確保が困難なためであろう。しかし、このことは、きわめて限定された現金収入の手段しか持たないハアノ村にとって、大きな影響をもたらすことになるかもしれない。現金を得るための活動が村のなかで日常的に行われるようになると、それまで社会を律していた論理がおおきくゆらぐ可能性があるからである (須田, 1995 a ; 1995 b)。Town Officer をしている男性 (世帯番号 05) が 2002 年 10 月に刺網を購入し、巻刺網漁を始めようとしていることは、村の論理に貨幣経済が浸透していく可能性を示唆している。さらに、離島振興のために新たに建設される発電所と埠頭が完成すると、冷凍冷蔵設備の充実や大型船の着岸も可能となるだろう (写真 11)。その結



写真11 建設中の埠頭

果、村の内外を問わず、漁獲物の販売がいつそう促進されるだろうことは、想像に難くない。現在、ハアノ村の経済、とりわけ漁撈活動は大きな変化のただ中にあるといってもよい。その変化が、どこへ向かうのかを知るためには、今後数年のハアノ村の人々と彼らの活動を、実証的なデータに基づいて分析していく必要があるだろう。

〈謝辞〉

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金『ラピタ人からポリネシア人への変容過程を探る先史学的研究』（基盤研究(A)(1), 課題番号 12371010)の補助を受けて行った。研究代表者の片山一道氏(京都大学霊長類研究所)には、調査地にご同行いただき、終始ご指導を賜った。共同研究者の小田寛貴氏(名古屋大学年代測定資料センター)には2002年度の調査にご同行いただき、公私にわたりお世話になった。稲岡司氏(佐賀大学)と松村康弘氏(国立健康・栄養研究所)には、調査地の選定について貴重なご助言をいただいた。また、アフエアキ直子氏には、現地調査に関してさまざまなご助力をいただいた。皆様に心よりお礼申し上げます。最後に、愚かな質問や振る舞いにもかかわらず、こころよく筆者らを受け入れてくださったシオネ・タリアウリ・フィフィタ、ロウトア・フィフィタご夫妻をはじ

めとするハアノ村の皆様に、衷心より厚くお礼申し上げます。

〈引用文献〉

- 足立己幸 (1986) 『トンガ式健康法の変化に学ぶ：カタ太りで健康，その将来』農山漁村文化協会
- Akimichi, T. (ed.) (1996) *Coastal Foragers in Transition*. Senri Ethnological Studies no.42, Osaka: National Museum of Ethnology.
- Bellwood, P. (1978) *The Polynesians: Prehistory of an Island People*, London: Thames and Hudson.
- Evans, M. (1999) “Is Tonga’s MIRAB economy sustainable? A view from the village and a view without it”, *Pacific Studies*, 22: 137-166.
- (2001) *Persistence of the gift*, Wilfrid Laurier university Press, Ontario.
- 口蔵幸雄 (1977) 「漁撈活動における年齢による仕事の配分」『人類学講座 12 生態』渡辺 仁編：雄山閣：313-335.
- Lieber, M.D. (1994) *More than a Living: Fishing and Social Order on a Polynesian Atoll*, Boulder: Westview Press.
- 村山伸子 (1999) 「トンガ王国の漁業開発と魚貝類をめぐる食生態」『太平洋島嶼と環境・資源』小柏葉子編 pp.161-198：国際書院
- Oliver, D.L. (1989) *Oceania: The Native Cultures of Australia and the Pacific Islands*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- 大塚柳太郎 (1977) 「一本釣り漁の活動系と個人差」『人類学講座 12 生態』渡辺 仁編：雄山閣：281-296.
- Reinman, F.M. (1967) Fishing: An Aspect of Oceanic Economy—An Archaeological Approach, *Fieldiana Anthropology*, 56: 95-208.
- Stevens, C.J. (1999) “Taking over what belongs to God: The historical ecology of Tonga since European contact”, *Pacific Studies*, 22: 189-219.
- Suda, K. (1994) “Methods and problems in time allocation studies”, *Anthropological Science*, 102: 121-127.
- 須田一弘 (1987) 「ニシンが去ってからの漁撈活動：焼尻島漁民の選択」『季刊人類学』18-3：173-218.
- (1995 a) 「生態と社会変化」秋道智彌他編『生態人類学を学ぶ人のために』世界思想社：217-237.

- (1995 b) 「ナマコ漁とキワイ社会のゆらぎ」秋道智彌編『イルカとナマコと海人たち』日本放送出版協会：141-163.
- 田和正孝（1997）『漁場利用の生態』：九州大学出版会
- 山本妙子，足立己幸，Langi Vaea(1895)「トンガ人のイモの摂取状況とイモに対する評価とのかかわり」『神奈川県立栄養短期大学紀要』17：15-24.